

ワールドトリガー—女神の名を持つ黒トリガー—

ぼいら～ちん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

三門市……その人口28万人の都市にはボーダーという「こちら側」の世界を守る為の組織の拠点がある。

この物語はその組織に所属する少女「三雲湊」とその仲間達の物語である。

9 / 25 4話追記修正

# 目次

#01	三雲湊は姉である	1
#02	吹上黎奈は攻撃手である	10
#03	三雲湊は万能手である	18
#04	一ノ宮かがりは酒を飲む	26
#05	三雲湊は擁護する	35
#06	三雲湊には友がいる	43
#07	迅悠一は彼を誘う	51
#08	未来はここから動き出す	58

## #01 三雲湊は姉である

「やっと放課の時間ですか……」

「なんだか物凄く疲れたような気がしますね」

ホームルーム終了の知らせるチャイムをBGMに黒髪のロングヘアの少女は肩を落とした。

彼女の特徴と言えばその首に巻いたマフラーと日本人らしからぬ青い瞳と絹のように美しい白い肌。

その隣には真つ黒な髪のポニーテールの少女、背丈はマフラーの少女よりも少し大きいくらいでブレザーのボタンを全開にし、シャツ出しをしている辺りかなりやんちゃをしていそうなイメージを覚える。

「そりゃあ5限の体育であんだけガチりや疲れて当然だろ」

「陸上部に所属していた人間として偶には真面目に走らないとダメかと思ひまして」

「でもお前、メインは槍投げだろ？」

「それでも走ることは陸上の基本ですから。」

まあ……何か別の理由で疲れているような気もしますが」

マフラーの少女は右手で目頭を抑えながら左手で肩を揉む。

最近仕事と受験勉強を両立しているため毎日布団に入る時間は日を跨いだ後、その上寝付きが悪いものだから疲れが取りきれない。

彼女はぐっすり眠れるマットレスというものを母から勧められたりしたがそれとこれとは話が別で現在とても困っていたりする。

「ま、俺らも今年は受験生だしな……なあ湊みなと、偶には喫茶店でも行かないか？」

プリン的美味いところ見つけてき」

「偶には甘いものを食べてゆっくりするのも良いかもしれませんがね!!  
行きましよう、黎奈くろなの弟妹も連れて5人で」

プリンというフレーズを聞いて湊と呼ばれた少女は目を輝かせながらポニーテールの少女―黎奈の手を掴む。

階段に差し掛かったところでこの体勢で昇るのは危険だと察したのか湊は黎奈の手を話すがその瞳の輝きは衰えを知らない。

「あれ？」

俺には弟と妹が1人ずつだから4人じゃないのか？」

階段を登りながらポニーテールの少女―吹上黎奈―は首を傾げ答える。

「何を言っているんですか？」

修も誘うに決まっていますよ。

修居る所に私あり、逆も然りです。

それはこの世界のСудьбаでありПровиденсです。

なぜなら私は三雲修の唯一の姉、「三雲湊」なのですから」

◇ ◇ ◇

「雷斗〜灯〜」

居るか？？」

扉の上に2―1と書かれた教室の扉から中へと首を突っ込む黎奈。

その後ろから私―三雲湊もちらりと中を覗き込む。

「うくん……なんか違うな気がすんだよなあ」

「私も同感です。」

湊さんはあんまり派手なのは好きじゃないかも」

「でも、やっぱりパーティーだし少しくらい派手でも良いと思いますよ。」

経費は全部黎奈姉さんがなんだかんだで出してくれるから」

中では黒縁眼鏡の少年と白いバンダナを頭に巻いた少年、そして白髪ボブカットの少女が一つの机を囲んで何やら話し合っていた。

「お、おいバカ!!」

来てんのにその内容はマズイだろ!!」

「ゲッ……湊?!」

ど、どうしたんだこんなところに？」

何か用か？」

「雷斗と灯を誘ってお茶でもしようと思ひまして。」

彰もどうですか？」

「いいっていいって!!」

俺達はもう少しここで世間話してるから」

「そうですか?」

それにしてもやけに仰々しいですね。

何かあつたんですか?」

「いやいやいやいや!!」

全然、全く、ほんつとに何でもないから!!

元チームメイトのお前に隠し事なんてするわけないだろ?」

「本当ですか?」

何か悩み事があれば相談にのりますが……」

私の質問に過剰な反応を示した白いバンダナの少年――松風彰は必

まつかぜあきら

死に手を振り回しながら弁明する。

彼は私達と同学年で支部は違うが私達と同僚で、以前は同じチームで活動していた。

そんな彰をじろりと舐め回すように見ながら言い放つ私。

その言葉にびくつと身震いさせて肯定する彰。

すごく……わかりやすいです。

「いやいや、本当に何でもありませんから!!」

本つ当にただただ世間話をしていただけなので!!」

彰同様、ぶんぶんと両手を振り回しながらわたたと抗議する黒髪  
ポブカットの少女――黎奈の妹である吹上灯は答える。

その隣で灯の双子の兄である吹上雷斗はやや呆れた顔で二人を見る。

「そうですか……か?」

でもみなさんからやけに濃い汗の匂いがします。

確かみんなは今日は体育の授業は無い日ですし……風邪でもひいてるんですか?」

「やっぱり湊さんに隠し事は通じないか。

流石はサイドエフェクトがあると違うなあ」

「隠し事?」

「ぎくつ」とでも言う様な効果音が似合いそうなほど大きく身震いす

る二人。

その光景を見て耐えかねたのかはあくど大きなため息を一つして答えた。

「いや、近いうちに俺の友達の誕生日があつてパーティーを開きたいと思つて。」

彰先輩とか灯に意見を聞いていたんだけど湊先輩はどんなのがい  
いと思う?」

「そうそう!!」

湊がだつたらどんなの開いて欲しい?」

「ぐいぐい攻めすぎだアホ」

「タコスツ?!」

雷斗の答えに水を得た魚の様な勢いでぐいぐい迫ってくる彰。

そんな彰に拳骨を喰らわす黎奈。

殴られた彰は顔面から床に向かって落ちていき顔を地面にうずめると同時に尻を突き出したまま動かなくなった。

……後輩が居るのにこんな情けない体勢で居るなんて……ドン引きです。

「そうですわねえ……私は装飾も立派だと嬉しのですが一番はやはりご飯が豪華なことですかね。」

昔はそこまで裕福ではなかった分沢山食べたいというのもあるのですが、沢山の友達と沢山のご飯を囲んで賑やかな食事、私の憧れですわね」

それこそここに居るみんなの他にも支部のみんなや学校の友達も一緒に。

想像するだけで楽しいです。

「豪華なご飯とみんな一緒に……ありがとうございます。」

参考になつたよ」

「あくまで私の主観だから参考になるかどうかはわかりませんが」  
「なあ、雷斗、灯。」

湊が最初にちらつと言つてたがこの後一緒にお茶でもどうだ?」  
「ごめん姉さん。」

今日はもう少しパーティーのことで相談したいことがあるし、支部で仕事があるから。

それにそろそろで金倉先輩も来るから」

「そうですか……残念です」

がつくしと一気に力が抜ける。

「で、でもあとでお姉ちゃん達も支部には寄るんだよね？」

その時にみんなでお茶にしたらどうでしょうか？」

「ありがとうございます!!」

甘いものを準備していただけるとうれしいです!!」

みんなでお茶と言う言葉を耳にした瞬間に私の体に力がみなぎる。

それに私にはまだ修という希望が残っている。

そのためなら……

「まだ私は頑張れます!!」

◇ ◇ ◇

「……修は転校生に学校の案内ですか」

肩を落としながら前屈みの姿勢で住宅街を歩く赤いマフラーを首に巻いている少女、湊。

そしてその隣で腕を組みながら歩く俺―吹上黎奈。

あの後、湊は弟の三雲修に電話をかけたのだが話の通り転入してきた生徒に学校を案内するため暇が無いという。

なのでTHEE of ブラコンガールことこの三雲湊は物凄く落ち込んでいる。

「まあ、そういうこともあるって。」

桐絵も誘ってみたらどうだ？」

「ん」

俺が提案するや否や湊はあたしに桃色のカバーの付いたスマートフォンを顔に突きつけてくる。

そこには「ごめん。今日は用事あるから無理(m|m)また今度暇があつたら誘ってね☆」という文面が表示されていた。



「……京介は？」

「バイト」

「……レイジさん」

「陽太郎のヘルメットの修理」

「葉」

「第一部隊の報告書の確認と支部の端末の調整」

「迅」

「着拒されました」

「……………」

「……………」

「雷斗達に見捨てられ……最愛の弟に見捨てられ……終いには修や支部のみんなにも見捨てられ……」

「……うわあああん!!」

「もうお家に帰りますううう!!」

「帰って柚宇とゲームしてますううう!!」

「修に断られた時点である程度予想は出来ていたがこの三雲湊は嫌なことがあると結構すぐに泣く、所謂泣き虫なのだ。」

「コイツ普段は俺らに散々「あんまり感情的になるな」とか言ってる割には一番冷静じゃなきゃならねえ狙撃手スナイパーがそんなんでどうすんだよって毎度思う。」

「落ち着けて。」

「……つたく、俺達お茶しに行くんだろ？」

「それにまだお前本部に提出する報告書書き終わってないし帰るのはまだ早いと思うよ。」

「最後に付け足すと柚宇の奴は今遠征で居ないだろ？」

「あ、そうでした。」

「じゃあ即行支部行って即行書き終えてそのあとお茶しましょう。」

「もちろん桐絵や迅さんたち支部に居るみんなで」

「だが、コイツの切り替えの早さと他人を思いやる気持ちってのは本当にくら褒めても褒めたらないくらいに凄い。」

「お、オウ。」

先にお茶じやないのな」

「私甘いもの食べると眠くなるんです。

体質には逆らえませんか」

「なら仕方ねえな……うん、しゃーないな」

いつも桐絵のお菓子食べた後に確実に寝ちまつて寝言でアウトなのはそういうことだったのか……

でも夏場のお風呂上がりのアイスとかは一体どうしていたんだろうか……？

まさか寝る直前に入って食べてからぐつすりとか？

いやいや……普通家に帰ってきてからシャワーに直行、上がったらアイス食べて勉強のサイクルの筈（俺基準）……まさか昼寝後に夜中まで勉強?!

「黎奈!!」

修の匂いが鼻腔をくすぐりました!!

しかも香りのもとはこの先です!!」

くんくんと鼻から空気を吸い込み声を大にして発言する湊。

やけに仰々しいと思ったが視界に入ったのは「立入禁止 近界民出

現注意 警戒区域」と書かれた立て看板。

この先は警戒区域と呼ばれその名の通り危ない場所であるため弟である修を心配しているためにこうなっているのだろう。

「……普通に本部に用事があるだけなんじゃないか？」

いや、転校生もいるからそれは無いだろうし第一アイツがこんなところ何も言わずに来る方が変だな」

「それに他にも人の香りがします。

私が知らない辺り一般の人と思われれます」

それに対して俺は至って冷静な対応をする。

先ほどから近くにはあたし以外居ないのに匂いがどうか一般人がどうか言っているのが気が狂っているわけでもなければイタイ子とかそういう類のものでもない。

彼女はものすつごく、それこそ犬なんかの比じゃないくらいに鼻がよく利くのである。

人間の匂いであれば半径10km内であればどこに居ても匂いを  
辿れるくらいに。

「……この匂いは……いえ、彼がここに居るはずは……」

「ん？」

「どした？」

「い、いえ。」

「なんでも……?!」

「来ます!!」

「ウウウー……」

『ゲート  
門発生、門発生。』

座標誘導誤差7・66。

近隣の皆様は速やかに避難してください』

ぶつぶつと何か小さな声で話していたと思えば湊は突如声を張り  
上げる。

その直後にけたたましく鳴り響くサイレンと機械音声。

そして辺りを見回すと宙に浮いている黒い球体からバチバチと紫  
電が迸りそこから白い巨大な怪物が現れた。

このサイレンと黒い球体、そしてその中から現れた怪物がなんなの  
か私はよく知っている。

「そう、これは——」

「タイムカード通す暇もなく仕事開始かよ。」

「まったく、近<sup>ネイバー</sup>界民の野郎共ももう少し空気読んでくれてもいいんじゃない  
ねえか？」

「それも言っていられません。」

あの辺りに修と民間人も居ます。

「急ぎましょう」

「つて言ってもお前は遠くから狙撃、主に急がなきゃならんのは俺だろ  
?」

「狙撃ポイント探しとか私にも色々あるんですよ!!」

「あたしが悪態を吐くと売り言葉に買い言葉とでも言うように湊が  
頬を膨らませあたしに向かって怒鳴る。」

「わあつたわあつた。

俺も体動かしてキツイしお前も頭使ってキツイ。

それでおあいこな」

「わかればよろしい。

では行きましょう」

あたしはブレザーの懐から、湊は腰に付いたベルトで固定されているホルスターの様なものから黒い棒状の機械を引き抜く。

「トリガー起動!!」

## #02 吹上黎奈は攻撃手である

『トリガー起動開始』

私の声に呼応して頭の中に機械音声が鳴り響く。

黒い棒状の機械から光のが溢れ、握っている右腕から全身へと伝播する。

『起動者実体走査 スキャン 戦闘体を生成 実体を戦闘体へと換装 メイン武装展開』

棒状の機械から再び光が放たれると同時に服装も制服から青、白、黒を基調としたジャケットに変化する。

そして私の右手に対物ライフル並の大きさの銃が現れる。

『トリガー起動完了』

「さあ、行きましょう。」

一般人の救助もありますので出来る限り早く」

左の手をぐっばぐっばと閉じたり開いたりして体の感覚を確認し、右手の対物ライフル―アイビスを右の肩に担ぎながら黎奈に声をかける。

彼女も私同様に服装が変化しており、ジャケットのデザインは同じなもの赤や黒を基調としており、腰の右側やや後ろのあたりには白と黒を基調とした1.5mはあるであろう大きさの大剣がベルト辺りにあるアタツチメントにマウントされていた。

「そうは言ってもこの辺りは俺らの管轄外だぜ？」

「いいのよ暴れても」

「怒られるのは私だけで結構です。」

「くれぐれも黒は使わないでくださいね」

「わーってるって。」

取り敢えずポイント探しの間に支部に連絡入れてくれ。

あといつも通りマップも頼んどいてくれ」

黎奈はそう言うのと敵の現れた地点へとびよんぴよんと飛んでいった。

「了解しました。」

葉、聞こえていました?」

『勿論です!!』

すぐに送るから待っていてくださいいね』

「さて、ここいらで射線の通りそうな場所は……」

私もトリオン体に換装したことで向上した運動能力を用いて家の屋根を伝って近場の7階建て程度のマンションの屋上へと登った。

◇ ◇ ◇

「おっ……見えてきた見えてきた」

民家の屋根を足場にして私―吹上黎奈は軽やかかつ順調に目標までの距離を詰めていった。

屋根住宅の屋根を足場に目的地へと移動していると四足歩行の巨大な怪物が視界に入った。

アイツらは「近界民<sup>ネイバー</sup>」と呼ばれる私たちの世界を侵略しようとするヤツらが送ってくる「トリオン兵」というヤツらである。

ヤツらはこの世界に住む人間を攫ったり殺したりする、つまり悪いヤツらだ。

そいつらを倒すために私や湊が所属している界境防衛機関「ボ―ダー」の出番である。

ボ―ダーに所属している隊員はトリガーというトリオン兵に対抗するための武器を持っており、強さに応じてS、A、B、Cと階級が分かれている。

そういう私はB級隊員だ。

諸事情により、だけどね。

「今日もお給料の為にやるぞお!!」

そう言うのと右の腰のあたりから伸びている大剣の柄に手をかけ、3階建ての建物の屋根を足場に一気に跳躍する。

最高点に到達すると逆手に持っていた大剣をくるりと回して順手に持ち替え大きい動作で振り下ろした。

「せーのっ！」

「?!」

真上から武器を振り下ろしたその時だった、何者かがトリオン兵の真上に現れ、拳一つで粉碎したのだ。

破壊したあとの土煙が舞う中に私は着地し大剣を振るう。

すると土煙は晴れ、煙の中心には白髪で黒い服のようなものを纏った少年が立っていた。

「湊、こちら黎奈。」

見たことないトリガー使いがバムスターをぶつ倒しちまった。

「どうする?」

『大丈夫です、彼は敵ではありません。』

彼にお礼が言いたいのでそこで待っててもらっても大丈夫ですか?』

「……わかった」

通信を切って武器をを腰の後ろのアタッチメントに固定する。

「なあ白髪坊主、私の隊長がお前にお礼を言いたいらしいから少し此処で待っててくれないか?」

◇ ◇ ◇

「あなたが、空閑遊真くんですね?」

湊が白髪坊主に対しての第一声はこれだった。

疑問形ってことは面識がないってことになるし、てつきり湊の知り合いかと思っていた私の予想は外れた。

もちろんのことながら、いきなり質問をされた白髪坊主は警戒しているのか身構えた。反応を見るにどうやら名前は空閑遊真で合っているらしい。

「……なんでそんなこと知ってるの?」

「……やはりそうでしたか。」

大丈夫、私はあなたと敵対するつもりはありません。

修を助けてくれたお礼を言いたいです」

湊は後ろにいる私とその隣にいる湊の弟である三雲修に対してちらりと少しだけ視線を向けた。

もちろん、敵対の意思がないということを示すためにも私と湊は既にトリガーの解除しており、もちろん刃物なんかも持ち合わせていない。

「……信用しても大丈夫そうだね。」

でも、なんで俺の名前を知ってるの?」

「それは……あなたから私の恩人と似た匂いがしたからです」

「……匂い?」

「空閑、この人は三雲湊、僕の姉さん。そしてこちらの人は吹上黎奈さん、姉さんのチームメイトだ。」

そして姉さんには強化嗅覚っていう特殊な能力があるんだ」

そう、湊には犬のそれなんかよりも凄い嗅覚が備わっている。

トリオン兵が出てきた時も、警戒区域内に修達が居ることを知れたのもこの能力のお陰である。

「なるほどね……ところで、俺から誰の匂いがしたの?」

「……空閑有吾……と言えばわかりますか?」

「……」

クガユウゴ……ただ聞いただけでは何でもない名前だ。

しかし、この白髪坊主の表情が少しだけ変わった気がする。

ほんのかすかに、というレベルであるが。

「……わかった、信じるよ。」

ところで、ミナトとクロナはオサムと同じボーダーの人?」

「一応、ですがね。」

私って上の人からはそんなに好かれてないんですよね」

あははと乾いた笑い声を上げる湊。大丈夫だ、嫌われてるのは私も一緒だからと頷く。

「なあ空閑、そのトリガーはどこで手に入れたものなんだ?」

もしかして、ボーダーの関係者なのか?」

「いやいや全然。」

「ボーダーの関係者だったのは俺の親父の友達」



「……じゃあ、そのトリガーはどこで手に入れたんだ？」

修の質問に白髪坊主が答えた直後にずっと黙っていた私は口を開けた。若干疲れてる為表情は怖いだろうし、元々だが口調はとても粗野だと思う。

でも何かを察してくれたのか空閑は表情を変えず私の質問に答えてくれた。

「この世界ではないよ、門の向こう側<sup>ゲート</sup>。

向こう側に住んでた俺は、オサムたちが言うところの「近界民」ってやつだな」

「……ってことは……お前はっ!!」

「待ってー!」

私が左腕に手をかけたところで湊からの静止が入る。

かなり大きな声だったことからはっと我に返った。

もう少しでやばい事が起こるかもしれないなかつたと思うと、段々と怖くなってきた、体に込められていた力は次第に抜けていった。

「……ごめん、空閑。

少し近界民には嫌な思い出があつてさ……」

「いいよ、別に。」

そういうのはあっち側ではよくある事だったから」

多分神妙な面持ちだっただろうが、空閑は何事も無かつたかのような顔をしている。

そんな私を尻目にとんでもない奴と知り合ってしまったという顔をしている修。

その姉である湊はどこ吹く風とでも言わんばかりに何かを考え込んでいるようだった。

「……!!」

みなさん、そろそろ帰りましょう。

このままだとほかのボーダー隊員に見つかってしまいます」

「それもそうだな……修、お前は空閑のことを頼むよ。

私らは私らで用事があるからさ」

「分かりました、空閑、行こう」

「わかった。」

またね、ミナト、クロナ」

手を振りながら修に手を引かれてこの場を離れていく空閑。

歳は修と同じくらいなのだろうが、住んでいた環境が私達とは違う所為なのか、少し雰囲気や幼い雰囲気をもっている感じがしなくもない。

しかしながら、相手は近界民である、これは支部長に報告すべきか……しないべきか……それが問題だ。

「……珍しく考え込んでいますね。」

そろそろ支部に行きますよ?」

「……珍しくは余計だよ」

◇ ◇ ◇

「ただいま戻りました」

「ただいま、雷斗、灯、居るか?」

「姉さん、湊さん、おかえりなさい」

「おかえりなさい、ご飯出来てますよ。」

今日はレイジさんが作ってくれたクリームシチューです」

私にとっては8年近く通い続けている「最高の職場」であり、黎奈にとつては家賃もなしかつ2食付きの最高の「住居」でもあるのがここボーダー玉狛支部である。

「おかえり、みなと、くろな」

「はい、ただいま帰りましたよ陽太郎くん」

所属する隊員達のダイニングスペースでもある部屋に入るとカピバラに乗った子供が迎えてくれた。この子の名前は林藤陽太郎くん、玉狛支部の支部長と同じ姓ではあるものの、血縁関係に関する情報をデータとして確認したい人間は支部の人間には居らず、結構謎に包まれていたりするお子様だ。

「みなと、きょうはおきやくさんがいるぞ」

「私に客人……こんな時間にですか?」

こんな時間、といえどまだ午後5時であるが、警戒区域内にあるこの建物には他のボーダー隊員しか用事はないはずで、普通は防衛任務や本部にいるか家に帰るかの3択である。

「湊お〜!!!」

「ひえっ?!」

陽太郎くんにそう言われるや否や私は横合いから飛んできた何かによって床に押し倒された。

「い、いきなり突っ込んで来ないでくださいよ摩梨……」

「ご、ごめん……つい嬉しくてさ」

はははと乾いた笑い声を上げるこの少女の名前は三船摩梨。

昼間学校で会った彰と同じ部隊に所属している射手だ。

3年前までは私とチームを組んでいたが、私が不慮の事故で行方不明になったがために解散、本部への転属が決まったあともこうして定期的に玉狛支部を訪れては私が稽古を付けてあげていたりする。

「今日はやけに嬉しそうですね、なにかあったんですか?」

「そう!」

えつとね、私ね、二宮さんに勝ったんだよ!」

「……まさか……?」

「そう!!」

新しいN.O. 1射手は私は、三船摩梨だぜ!!」

指をピンと立ててポーズを決める摩梨。

その発言に和やかだった雰囲気は一気に凍りついた。

「……レイジさん、シチュー以外には何を準備していますか?」

「揚げ物にサラダ、ケーキまで全部揃ってるぞ」

私の質問に対して台所に立っていた落ち着いた筋肉棒の木崎レイジさんは真顔でサムズアップ。

どうやらこうなることはどこぞの実力派エリートのタレコミによつてみんな知っていたらしい。

「もう少ししたら他のみんな帰って来るはずだからみんなが来たらご飯にしましょ?」

「わかりました、それまでは食器の準備とかをしましょうか」

階段から現れたメガネの少女、玉狛支部の第一部隊のオペレーター  
の宇佐美葉の助言によつて私も準備に加わる。

……師匠としては弟子の成功は精一杯祝つてあげなくてはいけませんからね。

## #03 三雲湊は万能手である

「はあ……」

「どうした湊、あんまり元気がなさそうだけど？」

隣を歩いてきた摩梨が私に対して心配そうに声をかけてくる。

今は学校が終わつての帰り道、今日は非番だったため、近くの商店街を吹上家の晩御飯の買い物も兼ねて摩梨を含めた3人でブラブラとしていた。昼間に修が通っている学校にトリオン兵が現れたという報告を受けたのだが、私達よりもA級5位部隊である嵐山隊の方が到着が早いということで結局私達や金倉隊の面々は普通に午後の授業を受けた。

私達B級隊員はトリオン兵を倒せば倒すほどお金がもらえる出来高払いで給料が貰えるが、別に今回敵を倒せなかったから落ち込んでいる訳では無い。

本当の理由は……

「先日引き続き修が訓練用トリガーを無断で使用したみたいなんですよ……あの子がボーダーを首にされてしまわないか心配で……」

「あー……確かに鬼怒田のおっさんとかが五月蠅そうだからなあ……こればかりは迅とおやつさんに任せるしかないな」

「そうだな、確かに修は見た感じは弱っちいけど正義感はあるし、頭が使えるいい子だ。」

伸び代はあるし正隊員になって使える装備も増えればきつと活躍の場も増えるだろうからここで首にするのも勿体ないと思うな」

全く以て彼女らの言う通りだ。

私は自分自身がブラコンであることは自覚している、しかし修は昔から自ら工夫を凝らして物事を解決することが得意な子だ。

私自身が頭を使って戦うタイプは嫌いではないし、修のような自らの危険を省みず他人を助けようとする人はこの御時世ではとても重要です。

「……よし、このまま本部にカチコミかけますか」

「なにいつてるのお前?!」

『緊急警報、緊急警報。』

市街地に門<sup>ゲート</sup>発生、市民の皆様は至急避難してください!』

黎奈と摩梨のツツコミが入ると同時にけたたましい警告音と共に川の方に真つ黒な球体が現れ、そこから大型のトリオン兵が現れた。

昨日のバムスターと呼ばれるタイプと同様にかなり大型だが、一際異彩を放っていた要因は「空を飛んでいる」ということだ。

「空を飛ぶトリオン兵だあつ?!」

あんなタイプ見たことないぞ?!」

「あれは対地爆撃用トリオン兵『イルガー』だぜ。」

文字通り腹のあたりから爆弾を落として地上を攻撃するタイプだ」

「……さつさと墜とさないと大惨事になりますね」

私はボーダーに在籍している期間はそこそこ長い。

それなりに戦闘にもなれているし、場慣れはしていると自負している。

しかし、そんな私でも焦ることはある。

そう、それが今だ。

額からは冷や汗が垂れてきて、状況の悪さに思わず苦笑いが漏れる。

「ゴチャゴチャ考えるのもめんどくせえ!

要するにアイツを墜とせば私らの勝ちなんだな?!」

「あははっ!」

よく分かっているじゃないか黎奈!

湊もやるぞー!」

「……もちろん!」

「トリガー起動!!」

光が体を包み、体が生身からトリオン製の頑丈なものへと生まれ変わる。

この間コンマ数秒、早いものです。

感慨深げに頷いていると、イルガーの腹部から何かが落ちてくる。

「湊、摩梨、あれ撃ち落とせるか?」

「そのくらい朝飯前だ!」

「ウォーミングアップにもなりませんね」

腹部から落とされる無数の爆弾のうちの一つに担いでいた大型のライフル型トリガー「アイビス」で狙いを定める。

横に居る摩利の両手には白い立方体が現れる。

「大火力で仕留めて誘爆を狙います！」

「No. 1 射手の弾幕をくらえ!!」

私が銃のトリガーを引き、摩梨の掛け声とともに四角い箱はクリスマスツリーのてっぺんに付けるための星の飾りのような立体へと分けられイルガーが放つ爆弾へと飛んでいった。

私の放った弾が爆弾に接触すると大きな爆発を起こし、周りの爆弾を吹き飛ばす。

摩梨が放った弾も目まぐるしく起動を変化させながら爆弾を穿つ。

しかし、相手の攻撃は緩むことを知らずどんどん爆弾はイルガーの下にある民家や商店街へと容赦なく降り注ぐ。

「くっ……これじゃあキリがないな……!!」

「摩梨はこのまま可能な限り爆弾を撃ち落としてください！」

「黎奈は市民の皆さん救助を、私は本体を落とします！」

「了解!!」

私と黎奈は摩梨を置いてそれぞれの仕事しやすい場所へと移動する。

そんななか私の脳裏に疑問が過ぎる。

「出現地点を警戒区域内に誘導しているはずの門がなぜ区域外に出現するのか」という点と「なぜ私の鼻で出現を検知出来なかったのか」という点である。

「姉さん!!」

「修?!

あなた……何故ここに?」

「商店街の方でも爆発があったから災害救助でも手伝えばと思って!」

川の方から走ってきたのは訓練用のトリガーを起動している修だった。

その手にはレイガストと呼ばれる大剣型のトリガーを持っておらず、彼のトリオンが著しく低下していることは一目瞭然である。

多分昼間の一件でまた無茶をしたのだろう。

「……なぜ助けようと思うんですか？」

ボーダー隊員として学校の友達にチャホヤされたいからですか？」

「……違う。」

僕がそうすべきだと、危険な目に遭っている他の人達を助けなければならぬと思っっているからだ！」

修の答えを聞いて私はホッと息を吐き出す。

なんとというか、修の答えを聞いて安心したからである。

「……ふふっ。」

あなたはやはりそういう子ですよね。

この先に摩梨と黎奈がいます、黎奈が被災者の救助をしているので手伝ってあげてくださいいね」

「わかった！」

『待つてくれオサム、ミナトにも私の一部を分けておきたい』

修に別れを告げ、先に行こうと思った矢先どこからとも無く私の名前を呼ばれた。

振り向くと修の顔の横には黒くて小さなチェスの駒のような物体が浮いていた。

『私はレプリカ、ユーマのお目付け役をしている自立型トリオン兵だ。』

よろしく頼む、ミクモミナト』

「御丁寧にありがとうございます。」

私は三雲湊と申します、修の姉です。

よろしく願います」

思わずペこりと頭を下げてしまうくらいの礼儀正しきでそのレプリカさんという名前の黒いチェスの駒は挨拶をしてきた。

どうやら遊真くんの保護者のようなものらしい。

「ところで、遊真くんのお目付け役であるあなたが私にどのような御用が？」

『ユーマは今、イルガーを倒そうと奮闘しているキトラの援護をして



いる。

もしミナトがイルガーを墜とそうと行動しているのであれば状況を知るにはこれが一番の近道だと思った次第だ』

説明を終えるとレプリカさんから同じサイズのレプリカさんがぽこんと現れた。

遊真くんが居ないと思っただらイルガー討伐の手伝いをしては……しかも話の途中で出てきたキトラという名前……多分嵐山隊の木虎藍ちゃんのことを指しているのだろう。

「なるほど……わかりました、ありがとうございますレプリカさん。」

さて、私はそろそろイルガーを墜としにいきます、レプリカさん、修めることはお願いします」

『心得た』

お互いに反対の方向へとダツシユで向かっていく。

私が高い建物を登り終えた頃には既にイルガーの背中からは黒い煙が上がっていた……きつと藍ちゃんがやってくれたんだろう。

A級5位、そして隊員達の人当たりの良さなどからボードアの広報なんかを担当する嵐山隊のメンバーだから舐められがちなどころがあるものの流石だと言わざるを得ない手際の良さである。

「……このままだとまずい……ですよねレプリカさん？」

『そうだな、イルガーは大きなダメージを負うと近くにある一番人が多い場所へと向かい落下、そして全ての内蔵トリオンを用いて自爆する』

ただそれだけなら地上部隊の黎奈や摩梨に任せれば大丈夫なはずだ。

しかし、そうは問屋が卸さないのが現実というものだ。イルガーが自爆モードに移行すると装甲が固くなるのだ。

摩梨の「魔砲」ですら撃墜出来るか微妙で、私の持っているレイガストでは切れ味が足りず弾かれるのがオチだ。

「レプリカさん、遊真ちゃんとコンタクトが取りたいのですがよろしいですか？」

『心得た……繋がったぞ、ミナト』

「遊真くん、こちら三雲湊です。」

「聞こえますか?」

『うん、聞こえるよ。』

「どうしたの?今の状況でも知りたいの?」

「いえ、あのイルガーは私が落とします。」

「遊真くんはトリガーを起動しないで出来る限り川から離れてください」

『わかった、あれは任せるよ』

「もちろんです、お任せください」

「プツツとかすかな音が漏れ、通信が切れたのがわかった。」

「確かに遊真くんのトリガーの破壊力を持ってすればイルガー程度なら造作もないだろう。」

しかし、遊真くんは「近界民」であるという事実がある。それを聞いたらボーダーの上層部、特に「近界民は敵だから殲滅しなくてはならない」という考えを持った城戸派の面々が黙ってはいないだろう。

トリガーを用いた攻撃を行うとそのトリガー特有の反応が出てしまう、それを危惧しての私の配慮だ。

「……落とすと言えどどうやってあそこまで行きましようかね……」

『移動手段だな、ユーマ、頼む』

『わかった、『弾』<sup>バウンド</sup>印、<sup>トリプル</sup>三重!!』

「えっ?!ちよっ?!うわあああああっ?!」

通信機越しに遊真くんの声が聞こえてきたと思えば、足下によく分からない紋章が現れ、私はイルガーに向かって弾き飛ばされた。

昨日提出された黎奈の報告書にもあった遊真くんのトリガーの「紋章を出す能力」というものがこれなのだろう。

ボーダーのトリガーにも同じような性質を持った「グラスホッパー」というものがあるが、それとはジャンプ力が桁違いに強化されている……バウンドという言葉の後のトリプルというフレーズが関係しているのだろう。

「レイガスト、スラストON!!」

レイガストをシールドモードにしてこのトリガーのオプションで

あるスラスタ―を起動する。

拳を覆うように展開されたレイガストはスラスタ―によって加速し、その拳はイルガーの顎（だと思っっている）部分に容赦なく叩き込まれる。

「斬るのがだめなら、ぶん殴るだけです!!」

その一撃によって大きく体を仰け反らせたイルガー、すぐさまレイガストをしまいアイビスを展開、マガジンを入れ替えてその尻尾（だと思っっている部分）に狙いを定める。

「墜ちろ!!」

狙った位置に着弾した真っ黒な弾は鉍石の結晶のような形に一気に膨れ上がり、その重さに引っぱられるようにイルガーは川へと落ちて行き、爆発四散した。

今のはオプシヨントリガーの「鉛玉」レッドパレットと呼ばれるトリガーの効果

である。射手／銃手用トリガー及び狙撃手用トリガーと併用することが出来、弾が当たったところに錘を付けるというトリガーだ。

それをトリオン量が多ければ多いほど威力が上がるアイビスと併用することで錘の重さでイルガーを落とすということである。

何にせよ、脅威は排除できたから、一安心だ。

私は重力に身を任せ、河川敷に着地した。

「ふう……藍ちゃんは大丈夫だったんでしょ……?」

「……なんとか大丈夫です……」

「うわ……なんかごめんなさい」

川下から聞こえてきた藍ちゃんの声は酷く落ち込んでいるようだった。

彼女はA級隊員という役職に誇りを持っており、それ故にプライドも高い。そんな彼女がB級である私に助けられ、さらに頑張つて戦つたのに敵にトドメは刺せない上にずぶ濡れ……テンションが下がるのも仕方が無い。

「お疲れ様です、今日はありがとうございました」

「……え?」

感謝するのは私の方ですよ湊先輩」

間の抜けた返事を返す藍ちゃん。

確かに私が居なかつたら商店街はイルガアの爆発のせいで更地にされていたかもしれない。手柄は私にあると思っけていてもおかしくはないだろう。

「いえ、イルガアを自爆モードまで消耗させたのはあなたです。私は少し討伐に手を貸しただけですから、今回は藍ちゃんの手柄ですよ」「そうですか……ありがとうございます」

褒められたからなのか少し頬を赤らめる藍ちゃん。

いやあ、この顔を写真に撮つたらいくらで売れるんでしょうかね？

◇ ◇ ◇

「姉さん、僕はこれから本部に行くけど、姉さんはどうするの？」

「私ですか？」

私は本部へカチコム 「やめなさい」

市民への対応も終わつていつの間にか夕方に。

修からの質問に素直に答えようとしたけど、黎奈と摩梨に口を塞がれてしまいました。

修の首がかかっているんだからそれを弁明するのはお姉ちゃん役目でしょう？え、違うんですか？

「おい湊、今日は玉狛にアイツが来るんだろ？」

「そうですよ、忘れてました。」

「ごめんなさい修、私は支部に用事があるのでここで失礼します。」

摩梨と藍ちゃんに迷惑をかけないようにしてくださいね？」

「わかったよ姉さん」

「遊真くんも一緒に来ますか？」

「オレは遠慮しておくよ」

遊真くんには断られてしまいました……まあ、過ぎてしまったことは仕方ありません、待たせるのもアレですし早めに帰りましょう。

## #04 一ノ宮かがりは酒を飲む

「……いきん………だ？」

「……りに………うぞ」

支部に戻ると日本酒の香りと共に男女一人ずつの喋り声が聞こえてきた。

一人はいつも聞いているからわかる、我らが玉狛支部が誇る筋肉モリモリ系のオカンの木崎レイジさんだ。オカンと呼ばれるだけあつて料理も上手ければ炊事洗濯はなんのその。果てには陽太郎くんのヘルメットすらも直してしまふのだから凄いものだ。

もう一人の声も私にはわかる。私の昔からの知人であり、言い方を変えれば姉のような存在だ。聞き間違えることは愚かその声を忘れるなんてとんでもない。

「ただいま帰りましたレイジさん、かがり」

「おかえり、もう晩御飯は出来ているぞ」

「よう湊、久々だな」

レイジさんとその銀髪の女性に声をかけると2人とも挨拶を返してくれた。彼女の名前は「一ノ宮かがり」、生まれたところは私と同じで、少し特殊な事情を持った21歳の女性である。同い年であるためにレイジさんや本部の隊員の風間蒼也さんや諏訪光太郎さん、チーフエンジニアの寺島雷蔵さん達とは仲がいいみたい。

「ええ、久し振りですね。」

「お元気でしたか？」

「数週間前に少し熱を出したくらいで後は大丈夫だよ。」

「全く、この体も難儀なものだよ」

お猪口に入っていた日本酒をくいと飲み干すと、彼女はとても気怠げというか面倒くさげにそう言った。

彼女は性質上……いや、体質と言うべきか、熱を出しやすいのである。その上、それが発症した時は38度を超えることがほとんどなため、そうなってしまうたら治るまでは氷枕の上で寝ていなければならぬ。元来、かがりはじつとしているのが苦手な為、彼女にとっては

苦痛でしかないのだろう。

「まあ、その辺りは何とかなりますよきつと。」

ところで、なんのおはなす」

ガチャツ

「おじやましませーす」

私が話題を変えようとしたところで玄関の方から声がした。玄関へ続くドアは空いていたのでそちらへと視線を向けるとそこに立っていたのは紙袋を持った彰だった。

「彰？」

「こんな時間に珍しいですね……何かあったので？」

「昨日摩梨がここに来たって聞いてさ、なんかお祝いしてもらったらしいからお返しをしようと思ってね」

そういうと彰は右手に持った紙袋を手渡してくる。中身を見ると、最近学校で何かと話題になっているお菓子屋さんが作るマカロンの詰め合わせだった。

「おお……これは美味しそうですね、ありがとうございます」

「いいっていいって、こっちは祝ってもらったんだしな」

私達が祝ったのは彰率いる松風隊のメンバーである摩梨なのだが、それに対してちゃんと感謝の言葉とお礼の品を持ってくるあたり、彰は出世するタイプなんだなあと心のそこで思った。

「彰か？」

「飯がまだだったら何か食べていくか？」

「いいんですか？」

「小南や京介の分だってあるでしょうに」

「いいんだ、2人とも飯を食わずに帰ったし、今日はもう林藤さんと陽太郎、俺と湊くらいしか残ってないし余ってるんだ」

「じゃあ、お言葉に甘えてさせていただきます」

ペこりとお辞儀をすると靴を脱いで支部の中へと彰は入っていた。彰は2年ほど前まで玉狛支部に籍を置いていたのだが、レイジさんが作ったご飯がお気に入り、たまに食べに来る程度にレイジさんの料理のファンである。

「げっ……日本酒飲んでるかがりが居る……」

「げってなんだげって。」

久々に会ったのにそれは流石に酷いと思わないか？」

「いやさ、お前、酔ってる時と寄ってない時の見分けがつかないし、何よりも俺に日本酒飲ませようとしてくるじゃんか」

ため息を吐きながら私の対面、レイジさんの隣に腰を下ろす彰。私とかがりは7年ほど前までロシアに住んでいたのだが、ロシアでは18からお酒が飲めるからと言って日本の一介のボーダー隊員に無理矢理飲ませるのもどうかと思う。それに未成年の飲酒、喫煙描写はR—15タグを付けているとはいえ何かとまずい。

「かがりも程々にしておけ。」

未成年の飲酒、喫煙描写はR—15タグを付けているとはいえガイドライン違反になる可能性があるからな。

彰、カツカレー」

「あ、レイジさんありがとー！」

「……何言ってるんだお前？」

レイジさんもそう言ってるんだからそういう事なんです。

何がともあれ、かがりは彰へのアルハラ紛いなことはやめてくれたようだ。

当の彰はと言えば、レイジさんが出してくれたカツカレーをととても美味しそうに頬張っている。彰は勉強とか運動とか色々あるからお腹が減るのはわかるのだが、なんとなく太らないか心配である。

「そうだ湊、さつきなにか話そうとしていたけど、何を話そうとしてたんだ？」

「いやですね、私が帰ってきた時に2人はどんな話をしてたのかなと思ひまして」

「あー……それはあれだ。」

あんまり突っ込んで欲しくないところだったんだけど……」

「端的に言えば、最近のお前のことについて聞いて聞いていたぞ。」

あとはボーダーの最近の活動についてだな」

「ちよっ?!レイジてめえ!!」

レイジさんが説明をしてくれると恥ずかしいのか酔っているのかわからないが、顔を真っ赤にしながら体をテーブルの上に乗り出して声を荒らげた。

そんなかがりを見た彰はニヤリと口を歪める。

「なあるほど……かがりつてやつぱりツンデレだなあ……」

「おいクソガキ、私が礼儀つてもものを教えてやろう」

「ま、待って!!」

悪かった、悪かったからそっちはマジでやめてく「rアッー!」

リビングから引きずり出される彰、その後数日間、彰は女性（特に三輪隊の月見さんや沢村さんなどの年上）を見ると酷く怯えて居たという。



「……こんな朝早くから私のことを呼び出すなんて珍しいですね悠一」

「メガネ君と湊が一緒なら一連のイレギュラー門ゲートの件が解決するって俺の副作用サイドエフェクトが言っているんだよ」

私と修の前を歩く男はけらけらと笑い声をあげる。

彼の名前は迅悠一、自称実力派エリートである。自らエリートを名乗るのはどうかとは思うが、彼の實力は我らが玉狛支部の支部長である林藤匠のお墨付きであり、私も素直に強いと思う。

悠一が言っていたイレギュラー門とは、本部務めの彰から聞いた話だと最近頻発している警戒区域外で起こる門のことを指し、先日の修の学校で起きた近界民ネイバーの襲撃や、商店街で起きた爆撃なんかもその影響らしい。

現在は鬼怒田開発室長によって門は強制封鎖されているが持つても2日程度で早急な対策が必要とされている。

この門が開く場所の特徴として、人通りが多い場所で発生しやすいというのが挙げられているが、交通量がまばらな住宅街なんかで起きているケースもあるため、一概に理由もわからないまま完全に後手後



手に回っているのである。ちなみに、どのケースにおいても近くに非番の隊員がいたために大事にはならなかったものの、修と遊真君たちのようなケースが今後起こらないかが心配である。

「よし、着いたな」

「よつオサムとミナト。」

「……そちらはどちら様？」

悠一が足を止めるとそこには遊真くんが居た。勿論レプリカさんも一緒なのだろうが、匂いがするだけで姿は見えなかった。悠一が居るところで姿を見られるのはまずいと思ったのだろう、懸命な判断である。

「俺は迅悠一、実力派エリートです！」

「俺は空閑遊真、宜しくねじんさん」

お互いにニヤリと笑っている表情を崩さず会話をする2人。

年齢的には4つ程しか離れていないのもあって2人は兄弟のように見えなくもない。

「それにしてもお前ちびっこいなあ！」

「これでもオサムと同じ15歳です」

「おおそうかそうか……!!」

悠一が遊真くんの頭をわしゃわしゃと撫でているのが尚更兄弟イメージを強めていく。しかし、何かを察した……いや、何かが見えたのか、その手の動きがピタリと止まった。

「……お前、向<sup>近</sup>こ<sup>界</sup>う側から来たんだろ？」

「……!!」

遊真くんは自分の正体を見破られたのに若干の動揺を見せつつもすぐさま悠一から一步離れて身構える。

勿論修も少しだが表情に動揺が見える、勿論私もこのような展開は望んでいないし、悠一だって同じだろう。

「待ってください。」

悠一に敵対する意思はありません。

確かにボーダーは近界民を排除することが目的ですが、私も悠一も向こう側には行ったことはありませんし、向こう側の人にもいい人が居

ることは重々承知です」

「……ミナトがそこまで言うなら大丈夫だと思うけどさ……」

でも、なんで俺が近界民だって分かったの?」

「俺には未来が見える副作用があるんだよ」

「未来視の副作用……?!」

先程から出てきている副作用という単語は著しく高いトリオン能力を持った人に発現する能力のことであり、私の強化嗅覚や悠一の未来視は副作用のうちの一つである。私の知っている限りだと強化聴覚や向けられている感情を肌の痛みなどで感じる事が出来る感情受信体質など様々なものが存在する。

「ああ、だから今日ここで遊真と会うことも分かったし、これから遊真がイレギュラーな門の原因を出してくれるのも見えてる」

「なら話は早いね、多分原因はコイツだよ」

そう言っただけで遊真が持ち上げたのはエイリアンの子供のような小さなめのトリオン兵だった。

胴体部分に穴が空いているあたり遊真くんが止めを指したのだろうが、トリオン兵を生身で持つのは何かと気が引ける。

『それについての詳しいことは私が説明しよう』

「うおっ?!」

み、湊……この黒いのはなんだ?」

『初めまして、私はレプリカ。』

ユーマのお目付け役だ、よろしく頼むジン』

「おお……これは御丁寧にどうも」

私が初めて話した時と同様にレプリカさんに深々と頭を下げる悠一。悠一本人もレプリカさんがトリオン兵だと言うのは薄々わかっているのだから些か冷静過ぎるのではないかと思うが、ここは敢えて何も言わないでおこう。

『説明に戻るとしよう。これは偵察、隠密用トリオン兵のラッドという。』

単体では攻撃力を持たず、所謂雑魚と言っても差支えはないのだが、この個体には地中に潜伏しながら周囲の人間からトリオンを収

集、蓄積することで門を発生させるという通常の個体にはない改造が施されていた。

プログラムを解析したところ、先日ここで倒したバムスターの腹部に格納されていて、人の活動が疎らになっていく時間帯に移動し街中に散らばったらしい』

「なるほど……確かに全てのケースで一般人よりもトリオン量が多いボーダー隊員が居合わせていたというのも頷けますね」

『ミナトの言う通り、ボーダーの隊員は一般人に比べて体内にあるトリオン量が多い。』

そのため、大量のトリオンを収集することが可能で、それが原因で門が開いたと考えるのが妥当だろう』

レプリカさんは淡々と事実を述べることによつて私の中で綻んでいた部分のパズルのピースが埋められていった。

「一つ思っただけけど、なんでこのラッドっていうトリオン兵は姉さんの強化嗅覚でも探知できなかったんだろう……？」

「その答えは単純です、ラッドが地中に潜っていたのとバムスターの匂いに混じつて判別が出来なかったからですね。」

いくら私の鼻が優れていようと蓋をされた容器の中身を判別するのは難しいですし、他の色々な匂いと混ざってしまえば匂いが小さいものが紛れ込んだのに気が付かないのは当然です」

伊達に隠密用トリオン兵を名乗っては居ないかと近界に居るまだ見ぬ敵に少しだが畏敬の念を抱いたのは言うまでもない。

「で、でも、これを全部倒せばイレギュラー門は発生しないんだろう？」

「うーん……それができれば終わりだけど、めちゃくちゃな数があるよ?。」

『ユーマの言う通りだ。』

少なくとも私が探知できている限りでは数千体はいるな』

「す……数千……」

途方もない数を耳にして修の顔は青ざめる。

もちろんそんな数は私達4人だけではどう足掻いても2日程度で

片付けることは不可能だ。

「おつと、ここからは俺たちボーダーにお任せを。」

人海戦術ならお手のものつてな」

「でも……大丈夫なのでしょうか……？」

悠一の一言に遊真くんはもつともな意見だともも言っているかのようによく頷いた。

しかし、修はどこことなく不安感を拭いきれない様子だ。

「大丈夫です、ボーダーは強くなりました。」

一人一人の実力も、隊員の数も、技術力も。

だから大丈夫、何とかなるはずです」

「行くぞ湊、本部にコイツを持って帰って解析に回したい」

「もちろんです、悠一。」

修、あなたは安全な場所に来てください。直に本部から本部から通達があると思うのでそれまで待機を。

遊真くんもありがとうございます、今度お礼に何かご馳走しますね」

そう言うのとトリガーを起動して悠一共に本部に向かって走って行く。

その後、ボーダー隊員は階級を問わず総動員され、改造ラッドは強制封鎖が解除される前に駆逐され、街に平和は戻った。

いやあ、良かった良かった。

◇ ◇ ◇

「ここが三門市……か」

夜の三門市のとある駅、黒いボーラーハットを被り、黒い外套を身に纏っている白い口髭を蓄えた外国人風な面立ちの初老の男性はキャリーバッグを引き摺りながら独りごちる。

ガラガラと音を立てながら男性は街の大通りにあるホテルに立ち寄り荷物を置いていくと、三門市の中心部―所謂警戒区域へと歩みを進めていく。

別段彼は人生に疲れて人気のない場所で自殺をしようとかそういうことを考えるような人間では無い。一人黙々と歩いていきもう少して警戒区域に入るといふところで男性に対して散歩中だった彼よりも歳を重ねているであろう老人が声をかけた。

「おいあんた、ここから先は危ないよ。」

見たところ旅行者みたいだから知らないだろうが、この先は近界民っていう奴らが出て来るんだ」

「…………ご忠告をありがとうご老人。」

亡き友人の遺体が見つかった場所がこの先にあるのです。すぐに戻ってくるつもりなのでご安心を」

「そうかあ…………もしもヤツらが出てきたら助けを呼ぶんだぞ？」

「ええ、もちろんそのつもりです」

帽子を脱いで胸元に当てると老人に対して一礼、そのまま進行方向へと再び警戒区域内へと男性は歩き出した。

警戒区域内に入ってから数百メートル歩を進めると徐々に遠くにあつた四角い建物―ボ―ダーの本部と距離が近くなつてきた。

「…………さて、このあたりか…………」

男性はそう呟くとその場で立ち止まり、腕を捲る。すると手首に付いている黒い腕輪がキラリと光るといつの間にか男性の右手にはカラスの頭が象られた柄を持つ杖が握られていた。

『登録外のトリガーの反応を確認、日佐人行つてくれるか?!』

『わかりました諏訪さん!』

これもまたいつの間にか耳に装着されていたイヤホンからは通信を傍受しているのかガラが悪そうな青年の声と素直そうな少年の声が聞こえてきた。その声を聞くと男性はニヤリと口角を吊り上げた。

「さあ、王の凱旋と行くこうじゃないか」

## #05 三雲湊は擁護する

「あれっ……？」

「ここで待ち合わせのはずだったんだけど……」

「あの自転車、遊真ちゃんと千佳ちゃんの匂いがします、ここに2人が居たことは間違いなさそうですね」

警戒地域からほど近い河川敷、修と一緒に遊真さんと修の友人である雨取千佳ちゃんあまとりちかと待ち合わせをしていた場所なのだが、何故か2人とも居ないのだ。遊真くんも千佳ちゃんも約束を無断で破るようなことはしないだろうし、きつと何かあったんだと少し不安になる。

「千佳に電話してみるよ、電話には出てくれるかもしれないから」

「……いえ、理由がわかったので急ぎましょう。」

警戒区域内にいるトリオン兵の近くに遊真ちゃんと千佳ちゃんの匂いがしました」

「あいつ……わかった、すぐに行こう!!」

修が千佳ちゃんに電話を掛けた直後に私は嗅覚が反応した情報を整理し伝える。遊真くんの気配はもともとトリオン兵のまわりにあったのだが、千佳ちゃんには敵の気配を察知するものと自らの気配を知覚出来ないようにする副作用サイドエフェクトのような能力が備わっていて、その能力の影響で私の嗅覚にも影響を及ぼしていたのだと考えられる。いきなり匂いが探知できるようになったのは多分修が彼女の電話を鳴らしたことで能力に乱れが生じたのだろう。不幸中の幸いとして遊真くんが襲われないように守ってくれているようだが、危ないのは確かだ。

「修、あなたは先に行ってください！」

レプリカさんは修のサポートを、私は後ろから援護します！」

「わかったー！」

『承知した』

目的地へ向かう途中に修と別れ、私は近くの高い建物の上へと登る。討伐目標は砲撃及び捕獲のために作られたトリオン兵のバン

ダー。それを確認すると私は弾速に特化した狙撃手用トリガー「ライトニング」を構え、照準を口のあたりに合わせる。

バンダーの弱点は砲撃後に口の中に見えるあるコアだ、きつと初めて見る修は今頃レプリカさんからその情報を貰っているはずだろう。

『こつちだ近界民!!』

通信機越しに声が聞こえた直後にトリガーを起動する修。すると、今までの訓練用のトリガーに換装した時の白い制服とは違い、青い服装へと換装した。その手に展開された武器は右手に防御に特化した攻撃手用トリガーの「レイガスト」、そして左手には射撃用のトリガー「アステロイド」だ。C級隊員は一つしかトリガーを装備できない、つまり修はB級に昇格したのである。

『ぐうっ……アステロイド!!』

レイガストでバンダーの砲撃を防ぐと、すぐさま左手に展開されたレイガストで口の中のコアを撃ち抜いた。

「今です修、切り捨ててくださいい！」

そう言う私の持っているライトニングという狙撃用トリガーの色が白から黒へと変化する。トリガーを3回引くと、放たれた黒い弾丸はバンダーの口の下に命中、着弾点には黒い錘が残っていた。その重さによりバランスを崩したバンダーは地に伏せる。

「おおおおおおお!!」

顔が地面に着いた時には既に目の前に修がスラスタによって速度が増した剣を振り下ろしていた。見事に真横一文字に両断されたそれからはトリオンが吹き出し、イルガーは動かなくなった。

「流石はB級隊員だな」

「ふう……2人とも一緒なら探す手間も省けて助かりますね」

近くの建物の陰に隠れていたと思われる遊真くんが身長が低めの黒髪少女を連れて現れた。遊真くんが連れてくる彼女こそが雨取千佳ちゃんである。

「千佳！危ないって言ったじゃないか！」

「……………ごめんなさい」

「まあまあ、2人とも何事もなかったのですから怒らないであげてく

ださい」

今回遊真くんと彼女を会わせたのは千佳ちゃんの体質について聞きたいことがあるという修によるものだ。千佳ちゃんはその体質のせいと言えればいいのか定かではないが強い自己犠牲の精神を持っており、このように修がそれを怒るといふのはよくある事なのだ。

「それはそうだけど……」

「それに、今日は千佳ちゃんの体質について遊真くんに聞きたいことがあるんでしよう？」

「聞きたいこと？」

集まった理由が聞かされていないのか、はたまた社交辞令的なものなのか、遊真くんは首を傾げた。

「千佳の事だ。」

コイツは近界民ネイバーを引き寄せる体質なんだ」

「ほほう……何で引き寄せちゃうのか聞きたいって事だな」

「そういう事です、仮説は私の中でも立ってはいいるのですがそれに確証を持たせるためにも聞きたいんです」

遊真くんは少し考えるような素振りを見せるが、顔を上げる時には何かに納得したように表情はいつも通りの朗らかなものになっていた。

『取り敢えずこの辺りは目立つ、少し人のいないところに場所を変えたい』

「了解です、それなら旧弓手町駅の辺りがいいですね」

そう言つて私が指し示したのは他のボーダー隊員が戦闘をしている位置と逆方向にだ。警戒区域の端ということもあり、ボーダー隊員に気付かれることもないはずだ。まあ、あとをつけられていたりすればまた別な話ですが。

◇ ◇ ◇

「さて、ここなら大丈夫でしょう」

手を腰にあて、ふう……と息を吐く。外に居ても変に目立ってしま



うために結局旧弓手町駅の構内に入ったわけだが、第一次近界民<sup>ネイバー</sup>侵攻以降、近界民が出る地域は立入禁止となり、その範囲に含まれているこの場所は言わずもがな廃駅となっている。改札機を無銭で通っても何も起こらないし、もちろん駅員室にもホームにも人は居ないし、待てど暮らせど電車が来ることもない。その情景に一抹の寂しさを覚えた。

「……ところで、なんで2人は一緒に居たんだ？」

「待ち合わせ場所に居たら知り合って」

「自転車に乗る練習をしたら川に落ちた」

「なるほど、わからない」

修が頬に汗をかきながらズレたメガネをくいつと上にあげる。私とはというと、無意識のうちに苦笑いを浮かべていた。

「そう言えば、お互いの紹介がまだだったな。」

千佳、コイツは空閑遊真、海外出身で僕と同じ学年だ」

「よろしく」

「で、空閑。こっちは雨取千佳、僕の家庭教師だった人の妹だ」

「ええっ?!」

ゆ、遊真くんって私よりも年上だったの?!」

「背が小さいからよく言われる、気にすんな」

確かに遊真くんの身長は低いですけど、どうやら千佳ちゃんは遊真くんのことを同い年くらいの子だと思っていたらしい。ぺこぺこ頭を下げる千佳ちゃんにいつも通りの気の抜けた調子で大丈夫大丈夫という遊真くん。寛大な心をお持ちですね。

「……本題に入らせてもらおうよ。」

空閑は千佳が引き寄せる理由はなんだと思う?」

「要するに近界民に狙われやすいって事だろ?」

それなら考えられる理由はトリオンだな」

「トリオン……どういうことだ?」

遊真くんがそういうと、修と千佳ちゃんは首を傾げている。うん、可愛い。写真に撮りたい。

「私も遊真くんと同意見ですね。」

近界民がトリオン兵をこちら側に送り込んでくる理由はリソースを補充することの一言に尽きますね」

それから、私は近界民とトリオンの関係性について説明を始めた。トリオンとはトリガーと組み合わせることでより近界民にとって生活を支えるエネルギーになるということだ。こちら側の世界から人々を攫う理由も様々で、兵力の増強、人がトリオンを生み出す為の器官である「トリオン器官」を収集するという目的が主である。主に兵士として連れ去られるのはトリオン能力の高い人間で、それ以外はトリオン器官を抜かれてしまうのだ。

「……と、このようにして兵士とトリオンを集め、向こうの戦争のリソースとして消費する、ということですよ」

「な……なんでわざわざこちら側の人間を……?!」

「そりゃこっちの方が人がたくさんいるからね」

「逆に、これだけ選り取りみどりの状況下で数年も狙われ続けるということは相当なトリオン能力を有しているということになりますね」

「……トリオン能力って？」

私達の話になかなか付いてこれなかったからか、おろおろとしていた千佳ちゃんがとうとう疑問の声を上げる。

「トリオン能力っていうのはトリガーを使うための力だ」

「……仮説を立証するためには千佳ちゃんのトリオン量を測定しなきゃならないのですが……機械を支部まで取りに行かなきゃならないんですよね」

『私に任せてくれ』

「うわぁっ?!」

どうしようかと首を傾げるとにゅっと言う効果音が似合いそうな音と共に遊真くんの指輪からレプリカさんが現れた。いきなり出てきたのでびびくりしたのか素っ頓狂な声を上げた。しかし、すぐさまレプリカさんが自己紹介をすると驚きつつもぺこりと頭を下げた。

『この測定索を使えばトリオン能力を測ることが出来る』

「ぜひご活用ください」

レプリカさんの口（と思われる部分）からよろんと先端に取っ手

のようなものが付いた紐が出てきた。

曰く、これはレプリカさんの機能の一つのトリオン量を測るためのものらしい。流石は多目的型トリオン兵である。

「……でも、少し怖いかな……」

「レプリカ、先に僕が測ってもいいか？」

『ああ、もちろんだ』

千佳ちゃんの不安を拭う為か、修が先にレプリカさんに頼んでトリオン量の測定をしてもらおうと名乗り出た。

レプリカさんはもちろん快諾してくれて、取っ手を掴んでから数分もしないうちに測定結果が出たようだ。

レプリカさんの頭の上には仄かに緑色を帯びたトリオン製の立方体が現れる。これは修のトリオン量を視覚化したものらしく、トリオン能力の大小に比例してこの立方体は大きくなるらしい。

「このサイズはどれくらいのものなんだ？」

「ふむ……トリオン兵から狙われるにはこの3倍は必要だな」

「僕は別に狙われたいわけじゃないんだが……」

この通り何の問題もないから、千佳も測ってみてくれ。

大丈夫だ」

「……わかった」

『……少し時間がかかりそうだ、楽にしていってくれ』

少し緊張しているような面持ちをしつつも測定策を握ってくれた。そしてレプリカさんの一言にこくこくと頷いた。

「そうだ、千佳ちゃんは中学二年生でしたよね？」

学校はどうですか？」

「はい、友達も沢山いるし、楽しいです」

「それなら良かったです」

千佳ちゃんの気を紛らわせようと他愛の無い世間話を始める。千佳ちゃんのお兄さんである麟児さんは7か月前に失踪してしまった。その為、日常生活や友人関係に支障を来たしてしまっていないかという心配をしていたのだが、どうやら杞憂に終わったようである。私はそれを喜んでいたのが顔に出たのだろう、気がついたらニツコリと

笑っていた。

『測定完了だ』

「おお……これは……!」

「オサムの何倍あるんだこれ……?!」

『尋常ではないな』

千佳ちゃんの計測結果にここにいる全員が感嘆の声を上げた。千佳ちゃんの測定結果を表す立方体は彼女の身の丈以上の大きさを誇り、修のと比較すると軽く10倍以上の大きさはあるだろう。

「これだけのトリオン能力があれば狙われ続けるのも納得ですね」

「……問題はどうかやって千佳を守るか、だな」

千佳ちゃんは過去に仲の良かった友人とお兄さんが近界民によって攫われてしまっている。そのことと彼女の内向的な性格が相まって他人に助けを求めることもしないどころか仲のいい人にすらこのことを教えることは無い。修が知っているのは家庭教師を務めていた彼女のお兄さんの隣児さんのお陰であり、私が知っているのも修からこの事を相談されたからである。

「動くな、ボーダーだ」

「A級隊員……?!」

「……なんであなた達が居るのかと思いましたが、まさか彼を追っていたとは……ねえ、秀次、陽介？」

背後から声が出たかと思っ振り向くとそこにはボーダー本部に所属しているA級隊員、三輪秀次みわしゅうじと米屋陽介よねやようすけが居た。そして、彼らの手にはトリガーホルダーが握られており、私が質問をした頃には2人とも無言でトリガーを起動していた。

「ボーダー未登録のトリガーだ。」

使っていたお前が近界民か？」

「待つてください!」

「こいつは……」

「オレだよ、近界民は」

レプリカさんの測定機能を使っていた千佳ちゃんに疑いの目が向けられる。修が誤解を解こうと弁明を始めようとしたが、それは遊真

くんの一言によって遮られた。

「その言葉に間違いはないんだよな、白髪くん？」

「うん、もちろん」

陽介が遊真くんに問いかけ、それに肯定するや否やドンドンドンと3回の発砲音と共に3発の凶弾が遊真くんに襲いかかった。

遊真くんの頭のあたりは煙で覆われ、何が起こったかわからない。

「いきなり発砲するなんて不躰ですね？」

「吹上灯……！」

なぜお前も三雲湊も近界民を擁護しようとする?！」

その声は空から降ってきた。

声のした方向へと目を向けるとそこにはひと振りの弧月を携えた

少女―吹上灯がいた。

煙が晴れると遊真くんは黒トリガーの能力であろうシールドを起動しているものの特に怪我をしている様子もなければシールドを損傷しているような形跡もない。それよりも、あまりに一瞬のことで本人ですら何が起きたかわかっていないようだった。

「……彼のお父さんは私の命の恩人ですから。

息子である彼を守るのは当然のことです……手伝ってくださいますか、灯?」

「もちろんです、湊先輩」

屋根の上から私の隣に移動すると携えている弧月の切っ先を秀次と陽介に向けた。

「……裏切り者の玉狛支部め……!!」

苦虫を噛み潰したような表情で秀次はそう呟いた。

## #06 三雲湊には友がいる

「良いのかよ湊先輩？」

「これであんたらはボーダーへの叛逆者だぜ？」

「恩人への恩を仇で返すことに比べたらそんなもの屁でもありません」

ぎりつと音が立つほど強く奥歯を噛み締める。

それにつられてレイガストを握る左手にも力が籠った。

「……………めんなさいね、灯。」

「こんなことに巻き込んでしまつて」

「大丈夫ですよ、死なば諸共、です」

「悠長に話をしている余裕があるだと……………?!」

「巫山戯るのも大概にしろ!!」

堪忍袋の緒が切れたと言うべきか、咆哮を上げた秀次は弧月による斬撃を私に見舞う。大振りで攻撃するのがバレバレの一撃ではあるもののそれ故に力強く、片手で持っていたレイガストを両手に持ち替えて防いだ。

「両脇ががら空きですよ……………とつ!!」

秀次の背後から飛び出した陽介が片手に持った槍による突撃を見舞おうとするが、レイガストの刀身をシールドモードへと変形させ、攻撃から身を守った。

「スラストー!!」

「くっ……………!!」

「うおっ?!」

そう叫ぶと体がレイガストに引つ張られるような感覚を覚える。それを制御してシールドで受けていた二振りの刃を押し返した。

「早く……………鋭く!!」

背後から小さく声が聞こえてきたのも束の間、秀次と陽介の腹部で一瞬だけきらりと何かが光った。

プシュー

すると、二人の腹部が5cmほど裂け、そこから体内のトリオンが溢れ出した。

◇ ◇ ◇

「今のは……一体……?!」

一瞬だけ米屋先輩と三輪先輩の腹の辺りがきらりと光った瞬間、そこからトリオンが噴き出した。多分あれは吹上先輩の弧月による一撃だろう。ただ、今までに弧月を使う正隊員の模擬戦などは何度も見たが、あそこまで早い斬撃は初めて見た。残像すらも残らない素早い攻撃……想像するだけでも冷や汗が止まらなくなった。

「早いだろ、あれ。」

トリガーの能力とかそういうのじゃないんだぜ?」

「ふ、吹上先輩?!」

「ははっ、雷斗でいいよ。」

吹上は3人もいるからな」

背後から聞こえた声に思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。振り向くとそこには目の前で戦っている灯先輩の双子の兄である雷斗先輩がそこに立っていた。

「……アンタはどちらさま?」

「ああ、俺は吹上雷斗。」

そこで戦ってる灯の双子の兄貴だ」

「ふきあげ……ってことはクロナの家族か」

「ああ、吹上黎奈は俺の姉さんだ」

空閑の質問に対して雷斗さんはこっと優しく微笑みながらそう答えた。

姉さん達が戦っている最中であるにも関わらず、2人は話を続けている。空閑に至っては命を狙われているはずなのに、僕でも分かるこの妙な安心感は何なんだろうと疑問符を浮かべながら再び姉さん達に視線を戻した。

◇ ◇ ◇

「挟まれます、ガードをー！」

「はいっー！」

私の得物と秀次のが、そして背後では灯のと陽介の武器がぶつかり、ガキイツと大きな音を立てた。

「スラスター!!」

そう叫ぶと三度レイガストは前に向かって推進力を得る。

「そう何度も同じ手は食わん!!」

レイガストに引つ張られるような感覚を再び覚える。

しかし、その時私はそれを手放した。

それは秀次の剣さばきによつて背後に弾き飛ばされた。

「隙だらけだ!」

「……ハンドルシフター!!」

私がそう呟いた時には既に秀次が左手に持つ拳銃から放たれた黒い弾丸が着弾する直前だった。

◇ ◇ ◇

「なっ……?!」

目の前で姉さんのトリオン体に真つ黒な重石が現れる。しかし、その表情は笑みを浮かべており、トリオン体の重石はごとんと音を立てて床に落ち、本体は青白い粒子となって消えていった。

「これで終わりっ!!」

「後ろか!!」

そのとき、三輪先輩のいる方向から声が聞こえた。視線を向けると、先程受け流されて背後に飛ばされたレイガストを左手に持っている姉さんがそこに居た。

三輪先輩は間一髪でそれをガードするとスラスターの勢いに任せ線路側へと飛んでいき、ホームの黄色い点字ブロックの直前で止まった。



「……背後にはお気を付けて」

「なにっ?!」

姉さんの眩きに釣られて後ろを向く三輪先輩。姉さんが居た場所にはトリオンでできた小さな立方体が宙を漂っていた。

「発射!!」

「シールドっ!!」

ほぼゼロ距離からのアステロイドが三輪先輩に向かって降り注ぐ。何発かは攻撃を受けるものの寸でのところでシールドでの防御が間に合った。

「タンゴダウン」  
敵を排除

「ぐっ……?!」

地面を蹴って三輪先輩を肉迫する姉さん。お互いの間合いに入ると互いに剣を振るう。姉さんのレイガストが弧月と交わると姉さんはその攻撃を巧みに受け流し、レイガストを捨て左手には黒い立方体、右手には青白い立方体を展開するとそれを一つに合わせて三輪先輩の右手と拳銃のホルスター、そして左足の3ヶ所にそれを撃ち込んだ。

着弾点からは撃ち出された弾と同じ色の錘が発生しその重さによつて三輪先輩は膝を付いた。

「……雷斗先輩……今の瞬間移動するトリガー……何なんですか……?」

「ただのテレポーターじゃないか?」

湊先輩のトリオン量なら使えないことはないと思うだろう?」

「でも、テレポーターにあんなデコイを出すような機能はないですし……なんだかレイガストを基点に瞬間移動したような気がするんです」

僕がそう言うのと雷斗先輩は少し驚いたような表情をした後ににやりと笑みを浮かべた。

「……よく見てるな修。」

答え合わせは全部終わってからだ」

そう言われて僕はまだ灯先輩が戦っているのを思い出しそちらに

視線を戻した。

◇ ◇ ◇

ガチンガキン

刃と刃が幾度となく交わり幾度目かわからない鏢迫り合いになる。そんな最中、湊先輩が三輪くんを倒したのに気付いたのと同時にふと米屋くんと目が合った。

「どうしますか、三輪くん倒されてしまいましたか」

「ここでやめろってか？」

何言っただ、せめて最後までやらせてくれよっ！」

私の問いかけに視線を逸らすことなく真っ直ぐこちらを見つめながら彼はそう答えた。

今風に言うところという人のことをバトルジャンキーとか戦闘バカとか言うんでしょうね。ただ、この真っ直ぐな目を見ていると不思議と頬の筋肉が緩んでしまうのがよく分かった。

「分かりました……ですが私も長引かせるわけにもいかないので……!!」

弧月を操り槍を弾くとそのまま体当たりをする。

「ぐっ……?!」

いきなりの事で驚いたたのか米屋くんは後ろによろめいた。

すかさずそこに向かって弧月の刃を振るう。

「甘い！」

しかし、寸でのところで体勢を立て直した米屋くんによって刃が弾かれる。それによって弧月を握っていた右手は外側に大きく投げ出され、私の胴体はガラ空きになる。米屋くんの槍が私に迫ってくる、弧月を手放し、空いている左手を米屋くんに向けて伸ばした。これは負けたくないという渴望から伸びた手ではない。

……勝利への布石だ。

◇ ◇ ◇

「なっ……?!」

いきなり右肩から先の感覚が消え去った。槍を握る感覚も、その腕が加速する感覚も、何もかもだ。

何が起こったか確認しようとしてそこに視線を向けようとしたが、その必要はなかった。

何故なら、視界の端に俺の槍と右腕が宙を舞っていたからである。灯の方へと視線を向けると両手には短剣型のトリガー「スコープオン」が握られていた。

「マンティスそれは反則だろ……!!」

バランスを崩した俺は勢いを右に向けて逸らし、ごろごろと地面を転がるようにして倒れ込んだ。

◇ ◇ ◇

「だあー！負けた！」

さあ好きにしろ！殺そうとしたんだ、殺されても文句は言えねー！」

「殺したりしないですよ。」

支部や考え方は違えど同じボーダーの隊員なのですから」

自棄気味に叫んだ陽介はトリガーを解除してその場で大の字に寝転がった。そんな陽介を見下ろしながら灯は半ば呆れながら答えた。そしてふつと微笑んだ後に陽介に手を差し伸べるとそれを手に取り立ち上がった。

「……一件落着、ですかね。」

「帰りましょうか」

「まだだ……まだ終わってない……!!」

トリガーを解除しようとした直前に背後から聞こえてきた呟きに背筋が震えた。

振り向くと鉛玉で拘束されていない左手で拳銃を握り締め、拳銃の照準器越しにこちらを睨みつけていた。

「ゲームオーバーだよ、秀次」

「あんたは……!!」

声が出た方向へと視線を向ける。するとそこには悠一と三輪隊の古寺章平くんと奈良坂透くん、そしてその後ろには声の主であろう彰が居た。

「味方は全員買収済み、それに敵は俺と迅を含めて7人、これでもまだやるつもりか？」

「ぐっ……ベイル……アウト……緊急……脱出オ!!」

彰の言葉に苦虫を噛み潰したような表情をすると秀次はやつと諦めたのかその場で弧月を手放し、怒りに体を震わせながら叫んだ。

掛け声とともに爆散する秀次のトリオン体、それと同時に一条の光が本部の方向へと飛んでいった。

「……賢明な判断だ。」

もし湊達が居なくてもやめておいた方がいいって言ったのを撤回するつもりはないけどね。

何せ、遊真のトリガーは黒フラックトリガーだからな」

「黒トリガー……?!」

◇ ◇ ◇

ガシャン

「黒トリガー……やはり……有吾さん……!!」

迅さんの台詞を聞いたその直後、無機質な落下音と共に小さくはあるが姉さんの声が届いてきた。姉さんを見ると、持っていたレイガストは無意識のうちに手放しており、その両手は鼻を覆い隠しており表情は見えなかった。しかし、手の震えや涙が溜まった瞳を見ればどんな感情を抱いているのかは一目瞭然だった。

「姉さん……大丈夫？」

「……大丈夫。」

ええ……大丈夫です……」

僕が声をかけるとハツとしたように体をピクッと震わせ、震えた声

でそう言った。

「ごしごしと目を擦るような仕草を見せると、何事も無かったかのようにいつも通りの表情に戻った。

「さあ、悠一、修。この後は本部に戻った秀次がこのことを偉い人たちに言うでしょうから私達が証言を偏らせないようにしに行きましょう」

「お、おう……じゃあ、またな」

「千佳、空閑！」

「お前達はなるべく安全なところに居るんだぞ!!」

「その辺は大丈夫です修くん。」

「あなた達が戻るまでは私たちが彼らを警護していますから」

「平常運転に戻った姉さんに迅さんと共に手を引かれる。空閑達のことか心配だったから声をかけると、大丈夫だと灯先輩が答えてくれた。雷斗先輩と松風先輩もにこやかに手を振っているから任せても大丈夫だろうと判断した僕は軽くお辞儀をして姉さんのあとを追った。」

## #07 迅悠一は彼を誘う

「どころでさ、白おちびはなんでこっちに來たの？」

俺―松風彰が白おちびごと空閑遊真へと問いかける。

今俺は湊の弟、修の友人である雨取千佳ちゃんに連れられて町外れの人気のない小さなお社を訪れていた。なんでも「ここなら人も來ないし安全」とのこと、あまり多人数で居ても怪しまれるということから雷斗と灯には一足先に玉狛支部へと戻ってもらった。そんな訳で俺は二人と一緒にいる訳だが、今は警護なんて堅苦しい言葉は似合わない和やかな雰囲気、昼食用に買ったハンバーガーを食べていた。傍から見たら完全にピクニックである。

「理由……というの？」

「例えばさ、会いたい人がいるーとか、やりたいことがあるーとかさ。近<sup>ネイバーフッド</sup>界に行ったことがある俺だからわかるけど、かなり大変な道のりだったんだろ？」

それだけの事をする理由を聞いてみたくてさ」

「まあ、楽だったと言えば嘘になるね。」

うーん……理由か……強いて言うなら親父が死んだから……かな」俺の質問に対して遊真は少し悩むように首を傾げるも、考えるだけ無駄だと思っただのか首をかしげたままそう答えた。

なんでも遊真は近<sup>ネイバーフッド</sup>界にある色々な惑星国家を旅していたそう。その最中で彼の父親は黒<sup>ブラック</sup>トリガーを残して亡くなった。その後は生前「俺が死んだら向こう側に行け」と言われたこととレプリカの勧めもあって、父親の故郷であるこちら側の世界、近<sup>ネイバー</sup>界民から言うところの「玄界<sup>ミデン</sup>」に來たそう。

「まあ、親父からは『ボーダーは近<sup>こっち側</sup>界と玄<sup>あっち側</sup>界を繋ぐ橋になる組織だ』って聞いたけどなんかイメージと違ったな。」

トリオン兵は誰彼構わず襲ってるし、ボーダーはボーダーで近界民を目の敵にしてるし」

「今はそうだけだな……でも、昔は違ってたんだ」

「何かあったんですか？」

「……5年くらい前の話なんだが……」

「……やっぱりここにいたか。」

探したぞ彰」

背後から突然俺の名前を呼ぶ声があった。いきなりの事だったのか目の前にいた遊真は身構える。その様子を見て俺は腰に付いているトリガーのホルダーに手をかけながら振り向く。

「げっ……お前は……」

振り向いた先にいた女性の姿を確認すると、額から冷や汗が流れ落ちた。

◇ ◇ ◇

「黒マントのトリガー使い……ですか」

「ああ、それに仮面舞踏会に付けてきそうな仮面も被った白い口髭のジジイだったって日佐人が言ってたんだ」

「なるほど……」

ところ変わってボーダー本部。遊真くんの事の報告、そして彼が旧ボーダー創設に関わった人物である空閑有吾くがゆうごさんの息子であることを示したことで私―三雲湊と悠一、そして修は旧ボーダー時代からの仲間である忍田さんから彼とのつなぎを頼まれた。そんな私だが、今は一緒に来た悠一と修を先に行かせて本部のB級隊員である荒船哲次あらかふねてつじと休憩スペースで話をしています。

私が本部に来たら一通り中を見回ったり、暇をしてそうな隊員を見つけて世間話をするのはボーダーに人が多くなってきた頃からの習慣になってしまいました。哲次だけと話すわけではありませんが、なんだか今日は本部内の隊員がそこはかとなく浮き足立っているような気がしたので、本部で何が起きたとかかそういうのを年が近く理論的な思考を持っている彼から知っておきたいなと思った次第です。

「小佐野の話だとトリガー反応はボーダーの登録外のものだったらしいし、ログを見せてもらえばわかると思うが杖みたいな形をした銃のトリガーを使っていたみたそうだ。」

上層部にも報告済み、対策が検討されてるって話だが……湊の耳には入ってないのか？」

「え？」

いえ、特に私のところには……」

「……お前、またなんかやらかしたな？」

「な、なにもやらかしてないですよー」

じーっと目を細めながらこちらを見つめ続ける哲次に思わず目を逸らしてしまいました。視線を逸らすのに釣られて首まで動いてしまった私を見た彼はがっくりと項垂れてしまいました。

「はあ……まあいい。」

俺がお前に対して言ったのはお前が夜間の防衛任務に入ることが多いからだ。

マント野郎の目撃情報は現状日佐人の一件だけだが用心するに越したことは無い」

「はーい、わかりました」

「やる気のねえ返事だなあ……つたく」

ふんつと鼻を鳴らす彼とは打って変わって生返事とも言えなくもない気が抜けた返事を返した私。しかし、黒いマントと白い口髭というフリーズに妙な引っ掛かりを覚えてしまった。

「……キング・アーサー……」

「ん？なんだそりや？」

「ほら、3年くらい前にイギリスの名のある資産家などを皆殺しにしたっていう」

「あー、あつたなそんなの。」

蓋を開けたら殺された奴らはみんな裏でひでえ事やってて国家規模で隠蔽してたからイギリス政府と警察がボロクソに言われたやつか」

「それです、その時に逮捕されたキング・アーサーことアーサー・チュカーリンという人物がそんな格好をしていたので……ほら」

スマートフォンをぽちぽちと操作して目当ての写真を探し当てると画面を哲次に向ける。写っているのはにっこりと笑ったダン



デイリーな男性でした。一見とても人当たりが良さそうな男性で、こんな人が大犯罪を犯したとは到底思えないという印象を彼に持ちました。

「……確かに服装の雰囲気は似てなくもないが、白い口髭たくわえたジジイ、だぜ？」

当時の年齢を考えても3年でそこまで老けるものでもないだろうに」

「……刑務所生活のストレスで老けた……とか？」

「……有り得ない話でもないな。」

わかった、調べてみるが他言は無用だからな？

出鱈目に不安を煽るのはあまり良くないからな」

「はい、ではもう少し休憩したら支部に戻ります。」

また会いましょう、哲次」

「おう、またな」

そういった彼は部屋をあとにします。私は休憩スペースを出ていく哲次の背中にひらひらと手を振りました。彼を見送り終えるところちようどポケットに入れていたスマートフォンがメッセージを受信したことを知らせるために震えました。ロックを解除し文面を見た後、私は支部へ戻ろうと席から立ち上がり部屋を出ました。

◇ ◇ ◇

「湊、お前からもしいつになんか言っちゃってくれ。」

いい加減携帯電話は電源入れておけって」

部屋を出る前に悠一から指定された集合場所はちようど本部から玉狛支部へと戻る途中でした。目的地に到着するや否や声を掛けてきたのはかがりです。彼女は遊真くんと千佳ちゃんの前に立ち、彼らと一緒にいた彰はと言うと、彼女の右手によって奥襟のあたりを鷲掴みにされて宙吊りにされていました。

「に、任務のすぐあとだったから仕方ないだろ……？」

それに、思いの外遊真と千佳ちゃんとの話が弾んだから忘れててさ

……」

「有意義な時間を過ごせました」

にんまりと笑みを浮かべる遊真くん。隣の千佳ちゃんにも視線を向けるとにこつと笑いながら遊真くんの言葉に同意するかのよう  
に頷きます。

「……まあ、いいのでは？」

遊真くん達だつて満足そうですし」

「そういう問題か……？」

まあ、いいか」

「ぐえっ」

遊真くん達の和やかな雰囲気にかけてられたのかかがりもどうでも良くなつたようで彰の服の奥襟を掴んでいた手がぱつと開きます。しかし、準備が出来ていなかったのか当の彰はべちやつと音が聞こえてきそうな勢いで地面に落下しました。顔から、べしやつと。

「まあこいつの事はどうでもいいんだ。」

修、本部のお偉いさんからはなんか言われたか？」

「そうだ、怒られたりしたのか？」

「怒られたけど……問題はそっちじゃない。」

本部の隊員に空閑が狙われているかもしれないんだ」

確かに忍田さんには遊真くんとをつなぎを頼まれましたが、本当に遊真くんと勇吾さんの間に血の繋がりがあると断言出来る訳ではありませんし、今の城戸さんはそんなことなどお構い無しに彼と彼が持つ黒トリガーをボーダーへの脅威だと断定し刺客を送ってくるでしょう。

「しかも今は非常に時期が悪いですね」

「うぐ……やっぱりあいつらが帰ってきてから送ってくるよなあ

……」

「あいつらつて？」

私の一言に対してやつとこさ立ち上がった彰がため息混じりにそうぼやくと、誰を指しているのかわからない遊真くんが首を傾げました。

「彰がいう「あいつら」ってのはボーダーでもトップクラスの実力を持った「近界遠征部隊」ってやつらのことだ。

さつき襲ってきた三輪隊もせいづらもボーダー内でも5%しか属していないA級隊員だが、A級の中でも上位に食い込むやつらのみが選出されるのが近界遠征部隊だ。

精鋭中の精鋭たるせいづらがもう少しで遠征から戻ってくるから、お偉いさんが差し向けて来る可能性があるっていうハナシだ」

「なるほど……確かにそれはやばいかもな」

「彼らがの選考基準には複数ありますが——」

冷静かつ淡々とかがりが説明するとそれに対して遊真くん表情が少し強ばったような気がしました。

疑問は解消したのだろうか問題が増えてしまった。私がかがりの説明に更に補足を加えると、確かに秀次と陽介……いや、三輪隊対遊真くんでも彼の黒トリガーをもつてすれば勝利できるだろう。ただ、遠征部隊となれば話は別です。

遠征部隊の選抜条件は選抜試験において「黒トリガーに対抗することが出来る」と判断されること。つまり、ボーダーにおいての対黒トリガー部隊ということであり確かな経験と高いポテンシャルを持つトリガーを扱う遊真くんですらも辛い戦いになることは必至でしょう。

「……あなたのお父さん—勇吾さんには私もかがりもお世話になりましたからね。彼が亡くなってしまった以上、彼が守ろうとしたもの—あなたを守ることでその恩を返させていただきます。

たとえそのならこの身を焼いても守り抜きましょう」

「私は自分の体を焼かないと戦えないけどな」

少し物憂げな表情をする遊真くんの目を見て私は覚悟とでも言うべきことを語る。そんななかかがりは私の背中をばんつと一発叩くと彼女のトリガーの特性とかけたジョークを言ったのだが、なんのことも言っているか分からなかった修と遊真くと千佳ちゃんは首を傾げていました。なんだか徐々に彼らの年相応の可愛らしい姿が見れた気がします。

「かがりのドン滑りのシヤレのことは置いておいて……こつちにも一応考えはあるんだ。」

なあ遊真……」

一つ呼吸をおくといつになく真面目な顔をする悠一。名前を呼んだ遊真くんの目を見つめながら口を開きました。

「お前……ボーダーに入らないか？」

## #08 未来はここから動き出す

「おお、ここが……！」

「そうです。」

「ここが私達の拠点、玉狛支部です」

川を跨ぐように建っている三階建ての建物、これが私達の基地「玉狛支部」です。元々は「川の何かを調査する施設」だったらしく、それが使われなくなったためにボーダーが買い取ったところにこの建物は建てられました。

今は玉狛支部となっているものの、ボーダーの活動が世間に公になる前―所謂大規模侵攻以前の「旧ボーダー」だった頃の拠点はここであり、その名残からか建物の入口に付いているボーダーのエンブレムは当時のものを使っています。ちなみに玉狛支部所属の隊員の制服にもこのエンブレムを使っており、現に私や悠一、玉狛支部のメンバーだった彰もこれを隊服のデザインに組み込んでいるんです。

「今うちの隊員は……吹上姉弟が残ってるだけだな。」

あ、ほかにも何人かいるみたいだ」

悠一がスマートフォンを操作しながらそう呟きます。そして2人でただいまーと言いながらドアの横についた端末に手をかざすと、機械仕掛けの玄関扉が開きました。

するとそこにはカピバラの雷神丸さんに跨る陽太郎くんがいました。傍から見たらシニール極まりないというか、珍妙というか、そんな光景に言葉を失った修たち。今更なのですが、カピバラって動物園にいるような生き物ですよ？

「あ、陽太郎くん。」

今誰かいらつしやいますか？」

「……しんいりか」

「新入りかじゃなくてさ」

「おぶっ」

私の質問に対して少し間を開けてやけに偉そうな返答をした陽太郎くん。そんな態度は修たちに失礼だぞと言わんばかりに悠一はへ

ルメツトの上から軽く頭をチョップしました。暴力はいけないんですよ、19歳職業ボーダー隊員の迅悠一さん。

「迅さんに湊さん、おかえりー。」

え？何、お客さん?!」

吹き抜けとなつている支部の玄関、そこから覗ける2階から元気な女性の声が聞こえてきます。上を向くとそこにはなんだか重そうにたくさんの荷物が入ったダンボール箱を抱えている我が玉狛支部が誇る第一部隊がオペレーター、宇佐美葉うさみしおりが居ました。

彼女は一年ほど前に本部から転属してきており、以前は現在A級3位に位置する風間蒼也率いる風間隊のオペレーターでした。彼女は蒼也さんと共に使用者のトリトン体を視認できなくするカメレオンというトリガーを用いた隠密戦闘特化チームをオペレーターという立場から作り上げた張本人です。

「あ、彰さんにかがりさんもいるの?!」

待つて待つて、今お菓子準備するから!」

「いいっていいって。」

俺は支部長に挨拶しに来ただけだからさ」

「私はレイジの飯待ちだからほつといていいよ」

「え、レイジさん今日非番だよ?」

「なにいつ?!?!」

荷物を持つてパタパタと走って行く葉。かがりの一言に急ブレーキをかけて振り向きながら返すと、かがりには驚きの声を上げてその場で固まってしまった。慌ただしく止まったり走ったりを繰り返す葉に、彰は苦笑いしながら遠慮がちに大丈夫だと言いました。

「やっぱりここはいいな、賑やかでさ」

「ええ、この居心地の良さが好きなだけにこの支部に籍を置かせていただいているようなものですからね」

ここに居た頃の日々を懐かしんでいるのか、しみじみとした雰囲気は彰は眩みます。私もそれにつられてそう答えました。特に意識はしていないが、少しだけ口角が上に上がったような気がしました。



「失礼します、支部長」

「お久しぶりです、支部長」

「おお、湊に彰か、おつかれさん。」

「迅も色々根回しありがとな」

ドアを開けると部屋の奥に置いてある机に座っている眼鏡をかけた短髪の男性がニカツと微笑みながら挨拶をしてくれました。彼は玉狛支部の支部長である林藤匠りんどうたくみさんです。彼は城戸政宗司令や遊真くんのお父さんである有吾さんの後輩で忍田正史本部長と同輩で、今回近界民である遊真くんを玉狛支部に匿う形で招待することを承認したのは彼です。曰く有吾さんには新人だった頃にお世話になつたらしく、これは亡き彼に対する恩返しの意味もあるかもしれませぬ。

「これくらいなんてことありませんよ。」

「俺なんてただ遊真と千佳ちゃんと一緒に飯食べてただけだし」

「お前がそこで警戒してるってだけで手出ししにくい状況になるんだからそれだけでも十分な成果だろ？」

「流石はA級部隊の隊長つてところだな」

頭の後ろを恥ずかしそうな照れ笑いを浮かべながらぼりぼりと掻く彰に対して再びにと口角を上げて笑みを浮かべる支部長。黒トリガー使いである遊真くんとA級隊員である彰を組ませれば司令もそう簡単には刺客を送つてこれまいと提案したのは彰本人で、その配が見事的中したとも言えます。流石ですね。

「さて……なあ湊、空閑さんの息子はどんな感じだったか？」

「どんな感じ……ですか。」

近ネイバーフッド界暮らしが長かったせいでこちら側の常識に少し疎いところもありませんが、いい子ですよ」

その言葉を皮切りにここ数日で知った彼のことを淡々と話していきます。彼の黒トリガーは攻撃、防御、機動力などの性能がどれも高く、故に高い汎用性を誇っているということ。そして黒トリガーでの

戦闘以外でも修のトリガーを使ってモールモッドを一撃で倒したという意味で個人の能力として高い戦闘力を持っていること。それらを自分の解釈と分析を織り交ぜながら報告します。

「彼が対人戦闘をしているところは見たことはない上に全ての能力を出しきっていない可能性もあるのでなんとも言えませんが、戦力としては十分です。」

修や千佳ちゃん、うちには他にも面識がある隊員がいるので余程のことがない限り危害を加えられることはないでしょう」

「……聞き入っちゃったけどそういう事じゃないんだよなあ……うーん」

あ、戦闘力とかの意味ではなくて普通に人柄なんかを聞いていたんですね。失念していました。

「迅、お前は？」

「普通にいいやつだと思えますよ。」

悪い奴ではなさそうですし、メガネ君達とか黎奈とも仲良くやってみたいだったし、大丈夫だと思えます」

「どうだ湊、これが模範解答だ」

「はい……」

そのからかわれているような口調に少しだけ頬を膨らませながら抗議するようににやにやと人の悪そうな笑みを浮かべる彼らを軽く睨みつけてやりました。ぐぬぬ。

「彰はどうだったんだ？」

「他愛もない話を沢山してたらしいし」

「俺もですか？」

そうですね……あ、親父さんが亡くなったから遺言に従ってこちらの世界に来たみたいですよ。

近界の色々なところを転々としながら生活してたのもあつて性格的な意味では少しドライで現実主義的などころもあるかも。

あと「ボーダーに親父の知り合いがいる」とも言っていました」

「そうか……彰のそういう分析能力は流石って感じだな。摩梨や志織<sup>しお</sup>たちを纏めあげてるだけあるよ」



志織というのは彰の部隊の隊員である金倉志織かなくらしおのことです。松風隊のポイントゲッターとして活躍しており、摩梨とオペレーターさくらぎあすはの桜木遊葉さくらぎあすはも含めてかけがえのない存在だと彼はいつも言っています。「ねえ彰、遊真くんはその「親父の知り合い」の名前などは言っていましたか？」

「そこは教えてくれなかったんだよね……あんま深いところまで聞くとかえって不快に思われるかもしれないと思つてそこまでは聞かなかったんだ。」

支部長は何かご存知ですか？」

「空閑さんと言つたらやっぱり最上さんしか思い浮かばないな……湊もそうだろう？」

「ええ、私が有吾さんと一緒だったのはひと月ほどですが宗一さんとはよくお話していた気がします。」

あと模擬戦も」

「やっぱりそうだよなあ……」

先程までの笑顔とは打つて変わつて支部長の表情が暗く神妙なものと変わります。最上さんこと最上宗一もがみそういちさんは有吾さんと同じく旧ボーダーの創設に関わった人の一人です。有吾さんとはライバル関係にあり、彼が居なくなつてからも献身的に旧ボーダーの活動に参加してくれた方である。悠一の師匠でもあつたが、5年前に黒トリガーの「風刃」を残して亡くなりました。

「最上さんが亡くなったことを知らせた上で私達が彼を本部から守りたいという意味を伝えれば……」

「そうだな、それでいこう。」

迅、空閑さんの息子さんを連れてきてくれないか？」

「了解、支部長」

そう言つて悠一は支部長室を後にした。残っているのは私と彰の2人。支部長はまだ神妙な面持ちを崩さないことからまだ私たちに言うことがあるのでしょう。

「迅の予知だと、本部の連中が遠征部隊を空閑さんの息子の黒トリガーを目当てに送り込んでくるらしい。しかも十中八九今週中だそ

うだ。

その時は彼を守るために働いてもらうことになると思うが、いいか？」

「はい、俺達松風隊に任せてください！」

A級トップ部隊だろうが何だろうがやってやりますよ！」

「それなら頼もしいな。」

一応お前らの直属の上司の忍田からも許可は貰ってるから気にしないでくれ。

で、湊なんだが……」

彰ににやりと期待の意味を込めた笑みを返す支部長。私の方に体をむけなおすと、少し落ち着いたようであり、何かを企んでいるかのような人の悪そうな笑みを向けました。

「なんでも、最善の未来に進むには空閑さんの息子の『無防備な姿』を  
なるだけ見せる必要があるらしい。」

向こうは現状相手の戦力を知らない状態だからな」

「なるほど、偵察部隊に隙を見せて襲撃の時間を絞らせるというわけ  
ですね。」

ただ……まだ足りませんよね？」

「足りない？」

時間だけじゃダメなのか？」

私の言葉に対して彰が疑問の声をあげた。彼は首を傾げながら顎に手を当てうーんうーんと唸り始めます。

「襲撃の日にちが読めないってことさ。」

それを確定させるには黒トリガーの本気を引き出すことが必要らしい……そこで湊の出番ってわけだ」

「私……ですか？」

レイジさんや桐絵ではなく？」

「ああ、迅の予知ではお前がその役目を担うみたいだ」

心底人が悪そうな笑みを浮かべながら支部長は私たちに語る。この人は何かを企んでいる時はすごく楽しそうに語るのです。いいことも悪いことも同じ調子で。ちなみに城戸さんからは「常に何かを企

んでいる」ように見えているらしいですね。

「……黒トリガーの使用許可は？」

右手のブラウスの袖からちらりと見える黒い腕輪に視線を向ける。これは私が所有する黒トリガーだ。悠一と同じで私の師匠だった人が作ったものであり、いつも肌身離さず身につけている。

「状況次第だな。」

向こうがそれを使って欲しいと言ってきたら迷わず使ってくれ」

「了解です、精一杯努めさせていただきます」

「そう言ってもらって助かるよ」

安堵したかのようににっと笑う支部長。ちょうどそのタイミングで背後のドアからコンコンとノックする音が聞こえてきた。多分悠一が遊真さんと修を連れてきたのでしよう。

「それでは俺達も失礼しますね、支部長」

「ああ、長話に付き合ってもらって悪いな」

去り際に支部長からの労いの言葉を貰いながらお辞儀をして支部長室を後にさせていただきます。

ドアの近くで待っていた修と遊真さんにひらひらと手を振りながらリビングまでの道を辿っていきます。

「あ……アイツこんなところに来てたのか」

彰が途中で足を止めると、外へと繋がる扉に付いた小窓を覗きながらそう呟いた。私も同様にそれを覗くと、あぐらをかきながら川下をじーっと見つめている黒い短髪の少女の姿がそこにはあった。少女は頭頂部から生えているアホ毛を風になびかせながら先に当たりが来たのを知らせるための鈴が付いた釣竿を構え、その先に繋がっているオレンジ色のうきをじーっと眺めていました。

「志織？」

玉狛に居るなら言ってくればよかったのに」

「ああ……湊か、久しぶりだな」